

勝呂画伯の絵画寄贈－信子夫人に感謝状

1995年に亡くなった校友で画家の勝呂孝資さん(昭23経学)の絵画が、信子夫人から寄贈され、3月7日、日高義博理事長・学長から感謝状が贈呈された。

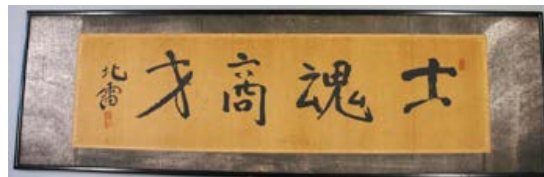
寄贈された「頼政」は現在、神田キャンパスの庶務課前応接室に飾られている。また、図書館本館4階の第2閲覧室には「追慕(卒塔婆小町)」が飾られている。



▲寄贈された「頼政」

田尻稲次郎先生の書「士魂商才」本学に寄贈

創立者の一人、田尻稲次郎先生揮毫の書「士魂商才」=写真=が卒業生から寄贈された。「北雷」という田尻先生の号がある。「士魂商才」は、「和魂洋才」をもじって福澤諭吉がつくり、渋沢栄一が多用して世の中に広まった言葉。広辞苑によると「武士の精神と商人の才能を兼備すること」とあり、企業理念や建学の精神に用いている企業や学校も複数見られる。



資料収集にご協力を

大学史資料課では、特に明治・大正・昭和戦前期の大学に関する資料、創立者、講師陣、同窓会、校友などについて、資料を探しています。

資料の所蔵や発見などの情報がありましたら、ご連絡ください。

【問】大学史資料課電話 03(3265)5879

《専修人の新しい本》

大学教育と「産業化」

吉家 清次 著

「大学紛争」期、「進学競争」期、「大学・厳冬」期といった波乱と起伏の時代を経験し、今春、本学を定年退職した著者は、大学の危機が社会問題化する以前から、諸課題の解決に取り組んできた。

本書は経済学者の「大学人」としての記録であり、高等教育「産業化」論、二部教育改革論、「出口」(就職)からの教育改革論、キャリア教育など、いままさに問題になっている事象の取り組むべき諸方策が示されている。

「入口」での偏差値的序列に一喜一憂する時代は去り、大学・学部の「個性値」の確立こそが肝要であると指摘する著者の論考は、大学と大学人の「存在理由」を考えさせてくれる(専大出版局・本体2000円＋税)。

著者(きっか・せいじ)＝本学名誉教授。



《専大校友を訪ねて》

「報恩奉仕」母校の教え実践

多摩市役所健康福祉部介護保険係長 伊藤重夫さん(昭63文)

社会福祉士、介護福祉士、介護支援専門員(ケアマネジャー)の資格を持つ。東京都多摩市の職員として仕事、ボランティアを問わず、「介護」「ヘルパー」「福祉体験」をキーワードにした研修の講師を務める。2月に開催された介護支援専門員協会の全国大会ではシンポジストのひとりとして参加。聴講者1000人を前に、高齢者ケアをとりまく問題について公的立場から意見を述べた。「専大で学んだことや培った人間関係、その一つひとつは大きな財産。仕事に限らず『生き方』の礎になっています」。

専大附属高から文学部人文学科社会文化コース(現社会学専攻)に進んだ。「社会福祉のネットワークの力に興味を持ちました」。

大学生活はとにかく楽しかった。ゼミの指導は日本の社会福祉史が専門の宇都榮子助教授(現教授)。児童から老人福祉までを多岐にわたって論じる宇都先生を中心に、ゼミ生はみな意欲的。「女子学生が圧倒的に多く、女性パワーにきたえられました」。

フィールドワークの大切さも知った。地域活動の場を探し求め、学生ボランティアサークルの草分け「樹々(きぎ)の会」に入部。神奈川県知的障がい児の団体とタイアップし“おにいさん”になって公園遊びやスポーツを共に楽しみ、子供たちと同じ目線で世界を見ることが出来た。施設の夜間指導員や警備員のアルバイトも経験した。

実家が八王子市の兼業農家のため、「自宅に近いところで社会福祉の仕事を」と多摩市へ。

卒業後、専大への感謝の気持ちがふくらんだ。年1回、卒業生のゲストスピーカーとして、宇都ゼミの後輩に体験談を披露する。嶺井正也経営学部教授からの依頼で、教職課程に位置づけられるようになった福祉体験の案内役講師にも。さらに地域の介助犬普及運動にも加わっている。大切にしていることばは「報恩奉仕」。もちろん、母校から教えられた精神だ。